

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Iraqw族の宗教的観念と儀礼

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 正平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008334

Iraqw 族の宗教的觀念と儀礼

和田 正 平

I は じ め に

Iraqw 族については、すでに、いくつかの研究報告⁽¹⁾が出されたので、ここで、ふたたび一般的な記述を繰り返すことは避けて、早速、この小論の主題にしたがって問題の所在を明らかにしたい。

まず、Iraqw 族は、比較的よく完結した信仰体系によって支持された広い意味での世界観をもっており、これが、社会構造をささえる基礎になっている。それゆえ、宗教を一切抜きにして、Iraqw 族の社会構造を論ずることは無意味であり、かれらの生活や行動を本格的に理解することは困難であるといえる。これは、Iraqw 族研究の先駆者である E. H. Winter もしばしば指摘⁽²⁾していることである。

また、Iraqw 族の宗教は周囲の Bantu 諸部族や Nilotes 系牧畜民と、かなりの類似性がみられ、同時にこれと交錯した宗教儀礼や呪術を発達させてはいるが、それにもかかわらず、なお、この部族の宗教は多くのユニークな特徴をもっており、宗教と結びついた複雑な慣行は解きがたい多面性をもっている。

Huntingford, G. W. B. は Iraqw 族のさまざまな特異性を考慮して、かれらを分類不能な部族のグループ⁽³⁾に包含しているが、それは、東アフリカにおける部族相互の文化的関連性から系統化をこころみた場合、Iraqw 族の南下の過程に関しては不明確な部分が多く、歴史的に信頼しうる資料はほとんど発見できないため、Iraqw 族の文化的特性を意味づけることがはなはだ困難であるということと密接な関係がある。そのうえ、現在、言語学を除いては、Iraqw 族の文化的系譜を探るための比較研究はまったく行なわれてはおらず、東アフリカにおいて、Iraqw 族が社会人類学的にもっとも関心が払われている部族のひとつであるにもかかわらず、全貌は明らかにされず、社会構造の核心は今なお謎につつまれているのが現状である。

筆者も Iraqw 族の研究にあたっては、社会構造の分析に主眼をおき、これまで、地域集団の形成過程や地縁構造をめぐる諸問題について若干の報告をこころみたが、そこに介在しているもっとも大きな要因である宗教については必要に応じて部分的に触れたにすぎない。しかしながら Iraqw 族の社会構造は宗教と不可分にからみあっており、これを理解するためには、Iraqw 族の宗教的観念の構造や超自然的信仰の体系、およびこれに結びついた儀礼や慣行を明らかにしておく必要がある。

そこで、今回は、社会構造へ接近する分析作業のひとつとして、できるかぎり具体的な記述により、Iraqw 族の宗教に関する包括的な報告をこころみたい。

調査は、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊に参加した1964年9月～66年10月にかけて、タンザニア西北部高地、ハナン山麓を中心に行なわれた。本論はこの期間に集収された資料が基礎になっているが、民族学的な資料が十分とはいえない。なお、おって調査を続行し、資料の完全を期するつもりである。

II 超自然界の構造

1. 空の神と地の精霊

Iraqw 族の超自然界の構造は、二元論的な思考が基軸になって成立している。つまり世界は天と地と二分され、宇宙を統一する唯一の神が天空に住んでおり、〈Loa〉といわれている。〈Loa〉は同時に Iraqw 語では時間を示す言葉であり、昼夜の交替や、乾季と雨季の規則的变化にみられるような宇宙の秩序をつかさどると信じられ、具体的には太陽になぞらえられ、これと同一視されることもある。これに対し、地上には、〈Netlangw〉という目には見えないが、水を母体とした無数の精霊が住んでおり、小川や森林、あるいはサバンナに孤立して立っている常緑の大木の蔭など、一般に湿気の多い場所を住処にしているといわれている。

Iraqw 族は〈Loa〉に敬意を払い、畏敬の念をもっているが〈Netlangw〉には嫌悪と虞れをもっている。それは、前者が慈悲深く、人々に幸福をもたらし、恩恵をほどこすのに反し、後者は病気をもたらし、不幸や災害で人々を苦しめると信じられているからである。したがって、Iraqw 族では〈Loa〉を

礼拝し、〈Netlangw〉を回避する儀礼が発達している。もし、〈Loa〉に敬虔なIraqw族であれば、起床してまず、最初に行なうことは神への礼拝であり、それは日の出の方向へ向かってツバを吐くという行為で表現する。Iraqw族にとってツバを吐くということは礼拝と同義語であり、〈Loa〉へ1日の安寧を祈る毎朝の慣習的な行為である。ただし、礼拝や祈願以外に〈Loa〉へ特別な供物を捧げる儀礼は発達していない。だが病気、不幸、災害などを避けるために〈Netlangw〉には供犠をもって厄払いの儀礼を行なうことがしばしばある。〈Netlangw〉は必ずしもつねに悪事を働くとは限らないが、悪霊に早変わりする性格があるため、供犠をもってかれらの目を逸らす必要があると考えられている。

Iraqw族の伝統的な思考では雷は〈Netlangw〉の仕業であり、洪水はかれらが暴れた結果と見做されている。これは、水が〈Netlangw〉の存在に依存しているという考え方からきており、もし水が涸れると、〈Netlangw〉はいなくなったといわれる。

さて、Iraqw族のあいだでは、〈Netlangw〉は人間が騙したり、誑らかしたりすることができるわけであるが、〈Loa〉は絶対に取り繕うことはできない存在として考えられている。誰にも知られていないと思っていた不正行為も〈Loa〉には必ず知られており、〈Loa〉の怒りにふれると信じられている。つまり、Iraqw族の倫理観はこの〈Loa〉の存在が基礎になって成立している。たとえば、次のような行為は〈Loa〉の怒りをかうため、真のIraqw族であれば犯してはならない行為として厳しく戒められてきた。⁽⁴⁾

- (1)正当な理由がない殺人行為、(2)正当な理由がない流血の惨事、(3)姦通、
(4)窃盗、(5)虚言(嘘、偽り)、(6)中傷(悪口)、(7)家族を崩壊させる行為、等。

このように、Iraqw族の道德律は〈Loa〉への信仰が基礎になっており、最終的な身の証しは〈Loa〉に対して立てなければならないのである。Iraqw族の超自然観にみられる二元論は次に〈Loa〉を女性になぞらえ、〈Netlangw〉を男性に擬人化することにもあらわれてくる。また、この2つの超自然的存在は善と悪という対立観念でもって性格づけがされているが、すでに指摘したとおり、〈Netlangw〉を悪霊あるいは悪魔という、いわゆる文明社会の観念で規定するわけにはいかない。⁽⁵⁾ 確かにIraqw族では身にふりかかってきた不幸を〈Netlangw〉の所為にすることが多いが、必ずしも悪がこの精霊の

本質ではない。時には、人間の願いを聞き入れてくれることがあるといわれ、〈Netlangw〉の善意に期待した儀礼も発達しており、しばしば実行されている。たとえば、男女の出産の比率が不均衡で、男子あるいは女子の出産ばかりが連続した場合、やはり〈Netlangw〉が介在していると考えられているが、慣習にしたがって儀礼を行なえば、人間の願いが聞き入れられるという信仰がある。すなわち、母親はこれまで生まれた自分の子供たち全部と近隣の子供たちを集めて、小川の辺りへ行く。そこでヒエを流れに向かってパラパラと蒔きながら、この精霊に「どうか女の子を授けて下さい」と頼み、何度か同様な言葉と動作を繰り返す。〈Netlangw〉はこの願いを聞き入れてくれると信じられている。そして、もし願い通り、女子が生まれると、早速酒をつくり、再度、子供たちを集め、同じ場所に立ち、全員がそれぞれ酒を入れた小さなヒョウタンをもち、これを口に含んでは、霧状にして吐き出し「さあ、もっと子供を与えて下さい」と〈Netlangw〉に祈願をつづけるのである。この例に限らず、Iraqw 族は〈Netlangw〉を回避し、あるいは放逐するばかりではなく、逆にこの精霊を呼び出して、願い事を聞き入れさせる儀礼が発達しているのである。

2. 死者の霊魂

Iraqw 族では、人間が死ぬと〈Tua〉になったといい、死者の魂が地下に降下し、かれが現世で生活していた土地とよく似た世界に住みつくといわれている。ところが、死者の魂はつねに生者の世界に強い関心を抱いており、〈Gii〉という悪霊になって生者の生活をおびやかすことができると信じられている。〈Gii〉は本来、祖霊であるが、現世の自分の子孫に怒りや不満をもつと、人間や家畜に危害を加え、病気をもたらし、一家を不幸に陥れる悪い祖霊になりかわってしまうといわれている。一般に〈Gii〉があらわれると難儀がふりかかってくるために、普段 Iraqw 族では、死者の名を何度も口に出すことは〈Gii〉を呼び出す行為になるため、禁忌になっている。しかしながら、もし家族が理由のわからない病気にとりつかれると呪術師のところで占いをたててもらい、そして病気の根源に〈Gii〉が介在しているという結果が出ると、呪術師の言葉にしたがって、〈Gii〉が欲している雄牛（時には雄山羊や羊）が絞殺され、肉は供犠にされる。また祖霊は酒が与えられないが故に憤激しているばあいもあるが、すべて祖霊を宥めるために呪術師の指示通

り供儀を用意し、儀礼を進行しなくてはならない。ただし実際には肉も酒も当日、家族と親族や、当日集合した近隣の長老によって食べられる。⁽⁶⁾日没近くなると客人は帰り、この〈Gii〉の儀礼を主宰した長老が前庭に出て、西の方向に牛の皮を置いてくる。この儀礼が完了すると、〈Xawi〉(後述)になったといい、家族だけで家にこもり、一切の来客を断わる。翌朝その皮がなくなっておれば祖霊ののりうつった〈Baha〉(ハイエナ)がやってきてこれを持ち去ったことになり、〈Gii〉の怒りがとけ、赦されたことを意味する。しかし、残っておれば〈Gii〉の怒りが並大抵でないことをさと、さらに呪術師の指示をあおいで〈Gii〉の怒りをしずめなければならない。

ところで、すべての死者の霊〈Gii〉が生者の世界に関与できるわけではない。乳幼児にはまだ〈Muna〉(心あるいは魂)がないと考えられているので、死ぬと父親が死体をかかえて遠くのサバンナのブッシュの蔭に捨ててくる。死体処理はハイエナにまかせられるのである。Iraqw 族で埋葬されるのは〈Muna〉をもった成人である。埋葬の仕方は長老であれば、息子たちが集まり、手分けして家の右手の前庭に穴を掘り、雄牛を畜殺する。

ついで形見分けが行なわれ、長老の腕輪がはずされ、孫(長男の)にかけられる。槍や小道具も孫の所有になるが、楯はそのまま長老の家(末子が相続することが多い)に置かれることが多い。そして死体は多くの場合、息子たちの手で埋葬されることになるが、その前に、牛の脂肪を長老の頭から全身にかけて塗りつけて、最後に生の牛皮で死体を包み、長老のゴロレや半ズボンに食料品としてトウモロコシやヒエを加え、煙草なども一緒に入れるのが普通であるが、その場合、死体を横臥させて、男であれば右上腕を手枕にさせ、下肢にそって左上腕をそのまま下方に延ばす。女は左右をこの逆にするのが慣例である。それは Iraqw 族の男女の性行為の体位を葬礼に反映させているのである。埋葬後は、そこに乾した牛糞を高く盛りあげて墓にする。墓には1年位の間、毎日牛乳をかけて慰霊するのが普通であったが、今では牛糞を盛りあげる行為だけが移転しない限りつづけられている。そして、もしその墓の上に草が生えてくれば、死者は地下で幸せに暮していると考えられるのである。また、もっとも大きく生育した草の先から故人が家に帰ってくることができるとも言われ、これが妖術師に切り取られると、血は天に昇り、2度とこの世に戻れなくなるため、家族で大切に見守り、育て上げなけ

ればならないといわれている。

III 禁忌および呪詛

1. 禁忌の構造

さて、〈Gii〉の儀礼の際、家族が近隣の訪問をさけ、ある一定期間、孤立状態になることはすでに述べたが、これは〈Xawi〉という他に、Iraqw 族は〈Meta〉あるいは〈Metimani〉ともいっている。〈Xawi〉はいわば不浄観に由来した禁忌の状態ということが出来るが、余りに多様な現象を含んでいるために、全貌を理解するのは困難である。〈Xawi〉には状況に応じて、厳しさにいくつかの段階がある。それは孤立期間の長さや、人々の回避の仕方というかたちになってあらわれてくる。家族の中から死者が出た場合、それが誰であろうと〈Xawi〉の状態になったというが、長老が安らかな死に至った時には〈Xawi〉の期間も短く、前節で述べた葬礼がとり行なわれる。ところがIraqw 族は不幸な死に方をした者に対する不浄観が厳しく、〈Xawi〉の期間も長い。また〈Xawi〉は、儀礼と結びついており、死人の発生それ自体をただちに、〈Xawi〉とはいわない。その後、儀礼的手続きのすんだ後に〈Xawi〉になったというわけである。さて、〈Xawi〉には少なくとも表にかかげた種類がある。このなかで注目されるのは妊娠と出産にまつわる〈Xawi〉である。Iraqw 族では出産にあたって、助産婦のごとき職業が専門化しておらず、夫の母親など年寄の縁者がこれにあたるが、難産の場合はきわめて危険な状態

〈Xawi〉の種類

-
- | | |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 1. 家族から死者が出た場合 | (i) 争いによって傷を受けた場合 |
| (i) 長老の死亡 | (ii) 野獣の襲撃によって傷を受けた場合 |
| (ii) 主婦の死亡 | (iii) 自らあやまって傷を受けた場合 |
| (iii) 青年の死亡 | 4. 反社会的な妊娠 |
| (iv) 乳幼児の死亡 (Meta Khaw ir nao-qauri) | (i) 妻が密通によって妊娠した場合 |
| 2. 異常分娩や異常成長の場合 | (ii) 娘が婚前に妊娠した場合 |
| (i) 逆児 | 5. 自殺 |
| (ii) 上歯が先きに出た場合 | 6. 火傷をうけた場合 |
| (iii) 片輪の場合 | 7. 家族に病気や不幸が続いた場合 |
| 3. 傷害の場合 | 8. 火事によって家屋が焼却した場合 |
| | 9. 落雷による被害 |
-

(7)
 になり、時には死産、または産婦自身が死ぬことも起こる。これはIraqw 族がもっとも忌み嫌う〈Xawi〉であり、もし、子供が無事出産しても母親が死んだ場合は、その子供は〈Panmo〉と呼ばれ、女兒であれば誰からも好まれず、成人しても結婚することがはなはだ困難になる。また、出産に前後して父親が死んだ場合も同様に〈Xawi〉となり、出産児が男であれば青年になっても〈Panmo〉と呼ばれ結婚できなくなる。次に、死産または産後まもなく子供が死亡した場合、死体は夕方、原野に捨てに行くことは前節で述べたが、帰ってきた父親はすぐ、入口の戸を閉じて、その不幸な妻と性的交渉をもたなければならない。それが不浄を払う儀礼的行為であり、ふたたび妻が妊娠し、次の出産が間近になるまで近隣との正常な交際関係を断って〈Xawi〉の状態を続けるのである。ところで、出産が終わって母子とも無事であっても、子供が逆児で分娩された場合は〈Sohho〉といい、かつては死産と同様に原野に捨てて〈Xawi〉の状態に入った。しかし現在は逆児の不浄を払う儀礼が発達している。すなわち羊を絞殺し、解体した胃腸から内容物〈Sanka〉をとり出し、それを土間の地面に細長く並べて「Sohho Tsawy」という言葉を繰り返しかえし唱えながら、ゆっくりと一步一步足を引きずるようにしてその上を通るのである。儀礼が完了すると、羊の肉は家族だけで食べることになり、以後15日間〈Xawi〉となり、周囲から孤立した生活が続ける。次に乳幼児の成長の段階で〈Xawi〉になることがある。たとえば、乳歯が上顎の方から先に出た子供は〈Gawy〉といわれ、イラク族の社会では大変嫌われる。そして、この汚れは清める儀礼もないため一生つきまとい、同部族内では結婚することはできない。それゆえ今日でも娘であれば隣接する牧畜民 Datoga 族に嫁入りさせることが多い。異常児の出産はすべて、〈Xawi〉になり、忌避されておるため、成人しても正常な結婚はできないのが普通である。

ところで、このような出産時における不幸とは別に、法的に許されない妊娠も〈Xawi〉の対象となる。すなわち、娘が婚前（結婚の腕輪をはめる前）に妊娠するのは不浄であり、〈Doroway〉といわれ、両親の下で出産することはできない。この場合、ハナン山麓では一般に、親の屋敷の近くに〈Itlangw〉という、粗末な小屋をつくるか、あるいはキリスト教の布教所の一隅をかりて出産しなければならない。この不浄な出産を〈Tsaatay〉といっている。また妻の密通によって妊娠したことが明らかになった場合も〈Xawi〉であり、そ

の子供は〈Awrumo〉と呼ばれている。

さて、Iraqw 族の論理にしたがえば、〈Xawi〉という状態には〈Netlangw〉がつねに介在しているという。〈Xawi〉は悪い〈Netlangw〉にとりつかれた結果でもあるが、同時に不浄な状態になると〈Neltangw〉が集まってくるともいわれ、たとえば血を流すのは〈Xawi〉であり、そこに〈Netlangw〉がやってくるといわれている。Iraqw 族が家畜を供儀のために畜殺する方法は、必ず絞殺であり、けっして刃物を使用しないのもこの理由による。したがって、如何なる理由であれ、肉体から血が出ることは不浄であり、〈Xawi〉になったといわれ、〈Netlangw〉が身近にやってきていることを知るのである。ただし、傷害の程度によって〈Xawi〉の禁忌も変差がある。

そこで、この種の〈Xawi〉について具体的な説明を加えると次のとおりである。

- (イ) 槍または矢のような武器で重軽傷を受けた場合、〈Tsixitu-r-mugtli〉といい、羊を絞殺し、解体した腸から糞〈Sanka〉を取り出し、回復を願う呪文を唱えながら、地面に投げつけて歩く。

この儀礼後、1～2週間〈Xawi〉となる。

- (ロ) ライオン・ヒョウ・ハイエナ等の野獣に襲われ、人間や家畜が傷ついた場合、〈Tsixitu-r-makitoo〉といい、(イ)と同様に〈Sanka〉の儀礼を行ない、〈Xawi〉の期間もほぼ同じである。ただし、襲われた人間の外傷が深い場合には、〈Qguma〉といわれ、癒ってもかれとの縁組みを忌避するクランがある。

- (ハ) 護身用の杖を喧嘩に用いたため傷ついた場合、〈Tsere〉といい、普通5日間位の〈Xawi〉になる。

- (ニ) 小刀や斧を使用している際、あやまって自分の手足を傷つけた場合、〈Tsere・muqtli〉といい、西の方角に茂っている草と植物の実をとってきて、入口のところで攪りつぶす。そして怪我人を太陽の沈む方向に向かって入口の敷居の上に立たせ、その足下に呪文を唱えながら、その草と実を3度投げつける。儀礼が終わると性交為は禁止されるが、せいぜい2日か3日の〈Xawi〉で正常の生活に戻ることができる。

- (ホ) 火傷をした場合も〈Xawi〉であり、〈Gunyoda〉といわれる。もし、子供が大きな火傷を負うと、完全に癒るまで他の家に遊びに行くことがで

きない。

また、娘になってもその瘢痕のため結婚することができなくなる。

(ハ) たとえば、木から落ちたりして腕や脚を折った場合も(ホ)と同様であるが、これは、クランによって〈Xawi〉の厳しさに差異がある。マンダ・クランでは絶対に結婚の対象にされないが、他の多くのクランは受け入れている。

一般に、Iraqw 族の女性は殺人を犯した者を極端に忌避し、配偶者の対象から完全に外してしまう。また、自殺も〈Naiso〉といわれもっとも恐れられている〈Xawi〉であり、自殺者の屋敷・畑・放牧地・家畜などすみやかに清めなければならない。しかしながら汚れはその後もなお残ると考えられ、人々はその場所を避けて通り、幾年かたっても、近づきたがらない。そして、〈Naiso〉の汚れは自殺者の属する母系血縁集団〈Daawi〉にまで波及するのである。自殺者と血縁的に近ければ、近いほど汚れが強いと考えられている。自殺者を叔父（母方）にもつ甥姪は〈Naiso〉があるといわれ、結婚が困難になる。かつては他部族の娘をもらうか、素姓が分からない処で結婚するか方法がなかった。最近はこの禁忌を破棄するものも出てきている。

この他に、出火によって家屋が焼却した場合や落雷のため被害を受けた家など、不慮の災難は大方〈Xawi〉になり、払い清めなければならないが、〈Xawi〉の全貌が明らかにし難いのは、適用範囲が広いだけでなく、結婚や性行為の禁忌と深く結びついているからである。

2. 呪詛と人間関係

さて、〈Loo〉といわれるIraqw族の呪詛には、怨みのある特定の人間を対象にして個人が呪う場合と、集団の怨みをかった不特定の人間を対象にして、被害をこうむった者が先導して呪う、いわば共同呪詛とがある。いずれの場合も呪詛は神〈Loa〉に対する訴えというかたちをとる。そこで、まず前者について具体的な例をもって呪詛の仕方を明らかにするならば、なんら正当な理由もなく、杖で打ちすえられて、いたずらに血がながれ、打撲傷で苦しんだ女性や、半殺しにあいながら抗弁できない立場にある男などが実行することが多い。怨みをもった人間は川のほとりか、蟻塚の穴のふちに立つ。そして、〈Loa〉に向かって、「某は理由もなくわたしを棒で打った。もっとかれに注目して欲しい。かれの家を破滅させて欲しい」と訴えるのである。また

「某の家に男子が出産したら必ず殺して欲しい」と呪うこともある。

このように、呪われた者は、一家に不幸や災難がふりかかるといわれ、呪術師〈Qwasarumo〉の処に行き、占いをたててもらうのがならわしになっている。占いの結果〈Qwasarumo〉は、「お前は昔、罪を犯したことがあるだろう。たとえば、誰かを杖でひどいめにあわせたことはないか」と尋ね、「どうして、自分の罪を隠すか、お前はその人に呪われているのだ」と災難の理由を明らかにする。

この〈Qwasarumo〉の言葉で自分が昔やった行為のなかに、人から怨まれるようなことがなかったかどうか記憶がよびさまされ、ある特定の人間に思い当たるわけである。

呪っている相手が確認されると、かれは、使者を立てて、その家に次のような証言をする。「自分は以前、お前を理由もなく打据えたが本当に悪かった。許しを得たい。わたしの償いを受け容れてほしい」と申し入れをする。相手が承知すると、地縁集団の長老がこの件について会議を開き、双方の人間関係を正常に戻すため、〈Loo〉を中止させ、そのかわり適当な償いを家畜の数によって決定するのである。もし犯した罪が深く、〈Loo〉を行使するのが当然と見做された場合は、雄牛3頭、牝牛1頭、羊1頭を相手方に償いとして渡すのが慣例である。また、使者となり、双方の意見を取りついだ者には羊1頭が礼金として渡される。そして、後日一切のわだかまりをとき、両家が今後、正常な交際関係に戻るため、相互飲食の儀礼を行なわなければならない。

それは、双方、綿密な連絡をとりあって稗酒の醸造にとりかかる。でき上がると、日時をきめて両家の人々が〈Loo〉を行使した家の前庭に集まる。入口の前に立った当事者2人は各々酒の入ったヒョウタンを2つずつ手に持ち、「俺とお前はこの様に一緒に酒を飲む。二度と同じ理由で、こんな事件を繰り返ささないことを誓う」と述べ、相互に持っているヒョウタンを交換し合い、地面に酒をまくのである。この儀礼がすむと両者は履き物を取り、呪った者が先になり、家の中に入り一緒にひとつの容器で共同で食事をする。

次に、〈Loo〉を受けた家に場所を移し、まったく同様な儀礼を繰り返し、双方衷心より仲直りし、罪は消え、呪いもとかれることになるのである。

このように、〈Loo〉は、個人の秘密的行為であるが、実際には、村内に知

れわたることを前提として行使するのが普通である。その方がむしろ呪詛の効果はあがるわけであるが、Iraqw 族の個人呪詛には、また、双方相手を確認した後、相互に呪い合う〈Loo〉がある。それは具体的には次のような事例によって示すことができる。すなわち、ある長老はかねがね、自分のことを悪い妖術師〈Darusumo〉だと、村内にいいふらしている者があり、大変迷惑をこうむっていた。そこで悪い噂を流した本人を呼びよせ、自分には身に覚えがないことなので〈Loa〉に証をたてたいと申し入れ、お前も自分が正しいと思うなら〈Loa〉へ誓うことができる筈であると述べ、どちらが妖術師かはっきりさせるため互に宣誓する約束をとりかわすわけである。そこで、両者は期日を打合せ、村内の長老に集まってもらい、その面前で「俺が本当にお前の言うとおりの、妖術師なら俺の家も家族もすべてなくなってしまう」と自らを呪い、相手も同様に自分が間違っているなら〈Loa〉のどんな罰をも甘受すると宣言する。このように、相互に呪い合いが終わり、以後、両家は、絶交状態に入り、相手の家で作った食物には、手を触れないで、道で出会っても口をきかなくなるのである。ところが、それから数年たち、一方の家で次々に子供が死に、原因が分からない。そこで、〈Qwasarumo〉の処へ行って、占ってもらうわけだが、結果は以前〈Loa〉へ宣誓したことが災いしていると出ることがある。つまり、相手を妖術師呼ばわりして宣誓したのは間違いであり、この呪いが家族の不慮の死となって表われてきたといわれたわけである。不幸の原因がこのように判明すると、早速、使者を出して和睦を申し入れ、雄牛9頭を償いとして提出し、すでに述べた儀礼を行ない、呪詛をといてもらったという。

次に、共同呪詛であるが、これは、数人の集団で行なわれることもあるが、大きな盗難事件などが発生し、地縁共同体の住民全体に嫌疑がかかった時は、犯人をあげるため、村長が主宰して規模の大きな呪詛に発展させることがある。まず、V.D.C.⁽⁸⁾といわれる地縁集団の代表に伝令を出し、日時を定め住民を集めさせ、集会の目的を明らかにする。つまり、村人の中に、悪事を働いた者があり、大変、みんなが迷惑をこうむっている。残念ながらこの土地は汚れてしまった。犯人をつきとめて、もとの平和をとりもどさなくてはならないと述べ、全員からこころあたりの情報を提出させるのである。この段階で犯人が発見されれば、事件は最初から解決していたようなものであるが、

時には犯人が杓として分からない場合もある。その時には、集合させる地縁集団の範囲を拡大し、女も出席させ、長老が順番に前に出て、積極的に事件の解決のために情報を提供するように要請する。

さて、この場合 Iraqw 族には、嫌疑を受けた者が蟻塚の上にたち共同で〈Loa〉に宣誓した後、一斉に前方に見える蟻塚に向って走る呪術がある。もし仲間の中に犯人がいれば、必ず、途中で穴に落ちるか、蹴つまずいて倒れるといわれている。時には、長老はこの呪術を強行することもある。そして、最後にどうしても犯人があがらない時には、住民全員を集合させ、1人ずつ、前面に呼び出し、裁判形式で会を進行させる。この場合は、全員が被告であり、裁判官になる。そして、次のような宣誓をさせ地縁集団全員の共同呪詛を受けることになる。まず、自分は〈Loa〉に誓って本当のことをいうと天に向かって宣言する。選ばれた長老は、この被告として立った者に対して盗難にあった物品の名前を順番にあげて、これらを盗んだ覚えがないかどうかを、また、少しでもこの盗難事件について隠し立てをしていることがないか問い質す。もし、本当に知らなければ、その場で神に対し、身の証をたてるがよいという。そこで「自分はこれらの物品を盗んだ覚えもなければ、この事件について何ひとつの隠していることもない。自分がもし嘘をいっているなら、神よ、自分の家も家族もすべて破滅させてもかまわない。そんな嘘つきは死んでしまえ」と呪うのである。そして、最後の文句は出席者全員も声をそろえてとなえ、呪詛に参加するのである。この共同呪詛は Iraqw 族にとってはもっとも怖い裁判であり、〈Loa〉の怒りを避けるため、必ず、口を割る者が出てくるので、事件は解決されるのである。そこで、共同呪詛が行なわれることになると、前夜、ひそかに盗難にあった品物が、その場所か、その近くに返されるのが普通なのである。

IV ウィッチクラフト信仰

1. ウィッチクラフトの諸相

Iraqw 族は〈Loo〉とは別に、超自然的能力をもって、妖術〈Daari〉を行使する人間の存在を信じており、これを〈Darusumo〉と呼んで、非常に怖れている。〈Darusumo〉の性格は、つねに陰険であり、人に害悪を与えるためには、あらゆる機会を利用して行動するといわれている。そのうえ〈Daari〉の

行使は秘密に行なわれるので正体もまったく明らかではない。

しかしながら、Iraqw 族では〈Darusumo〉は、おおよそ次のような5つの方法を用いて目あての人間に接近し、ウィッチを行使するといわれている。

〈Tsaganay〉

これは、〈Darusumo〉が食物に呪いをかける場合で、もし呪いのかかった食物を食べたり、飲んだりすると、その人間は活力を失い、病気になる。また歯でかんだり、においをかいでも同様な影響をうけるといわれている。幸いにもこの呪いを消す薬が手に入れば回復することもあるが、さもないと助ける手段はないといわれて怖れられている妖術である。

〔事例1〕

Giting 地区で、ある少年が遊んでいたとき、おなじ地縁集団内の主婦によばれて、玉葱を御馳走になった。この日からこの少年は病気にかかり3年後の今も、かつての健康状態にもどらなかった。あらゆる施術師にみせても無駄であった。そこで少年の家の人々はこの主婦を〈Darusumo〉として一切の交際を断ったのである。この主婦は集団的なレベルではまだ〈Darusumo〉として扱われてはいないが、周囲のものの恐怖心は強く潜在している。

〈Hayohata〉

これは、〈Darusumo〉が呪詛の対象になった人間の身につけているものの一部、あるいは持ちものをひそかに持ちかえり、これにウィッチをかける場合で、その他身体の一部、たとえば、髪の毛やツメまたは吐き出した唾のように体から出る汚物のすべてが呪詛の対象になる。場合によっては足跡として残った砂などが使われることがあるという。これに呪いがかけられると、その人間は病気になり、死に至る危険さえあるといわれる。回復にはよほど有能な〈Qwasarumo〉の助けがなければ効果がないといわれている。

〔事例2〕

Iraqw 族は外出する時には必ず護身用の杖を携帯する。集会で酒が出たとき、大勢の人々の杖がひとところにまとめられて置かれていたが、帰るとき、ある長老は自分の杖が見えなくなっているのに気がついた。かれらは〈Darusumo〉が自分の杖を持ち帰ったのではないかといひ、不安で寝られず、翌日から必死で探して歩いたのである。

〈Kwatita〉

これは〈Daari〉が直接的接触によって効力を発することに特徴がある。〈Darusumo〉は気づかれないようにしてさわる。その結果、さわられた人間は病気になり、ひどく苦しむといわれている。呪縛をとくには、〈Qwasarumo〉の処へ行って、薬を乞うわけであるが、かれは病人を〈Daari〉に接触されたと思われる地点へ行き、この呪縛を解く呪術を行ない、牛の脂肪をまぜた独特の薬を病人の体にぬり、呪文をとなえて唾をふきかける。それで直ることがあるという。

〔事例3〕

月夜の祭には、大勢の青年男女が集まってきて、円形になり、明け方近くまで踊りが続くが、深夜は〈Dakingw geva〉といわれ、妖術師と野獣がもっとも活躍する時間となるため長老は娘の無用な外出は好まないが、祭りなどの場合には集団で参加するので許可するのが普通である。しかしながら、踊りの場所では素姓のわからぬ人間と接触する機会が多く、また踊りの最中には実際に接触されても気がつかないため、〈Kwatita〉にかかる危険が多いといわれている。ある長老は月夜の祭りに行った娘が翌日身体をこわしたので、以後彼女が祭りに出かけるのを禁止したが、これは〈Kwatita〉の妖術を怖れたからであるといわれている。

〈Hairi〉

これは眼力を使う〈Daari〉である。日頃羨望の的である人間に対して行使され、嫉妬のまなざしでジット直視されることによってかかる。このウィッチにかかると、その人間は〈Darusumo〉の思いどおり行動するようになり、ついには、貧乏になり下ると考えられている。

〔事例4〕

ある長老は、集会から帰ってくるたびに、「あいつの目はくせものだ」ということを口走っていた。これは〈Hairi〉の呪力を怖れていたためであり、日頃から、目つきの悪いその人間が、肥沃な自分の土地を羨望しており、自分をこの土地から追い出し、のっ取るのではないかという深い疑惑にとりつかれ、自分の心の中では密かにかれを〈Darusumo〉に決めていた。

〈Gwangaraamit〉

これは、動物を使う〈Daari〉である。ハイエナやジャッカルが〈Darusumo〉の化身であり、夜な夜な、呪詛の対象になった家にやってくる。そして、屋

敷のそとで騒ぎたてたり、ぐるりをふざけまわる。ときには足を踏みならし戸口をたたく音がするが、姿はなく、戸の隙間からのぞき込んでいるような気配を感じるが姿は見えない。それにもかかわらず、家のなかにいるものの名前を全部知っていて、外から呼びかける。もしこの時、運悪く呼ばれて返事をしたならば、以来、声がかれてしまい、ついにものをいうことさえできなくなってしまうといわれている。また家族全員が病にとりつかれる場合もある。この〈Daari〉は、他の場合と較べて際立った特徴がある。つまり夜行性であり、正体がまったく分からず、目的の屋敷までハイエナにまたがってやってくるというわけである。服装は口では表現できない異様なものを身にまとっており、サバンナのなかをウム・ウムという、あたかも病人のような低いなり声を発しながら近づいてくるといわれる。

目的地につくとハイエナからおりて、仕事をはじめのわけであるが、この呪詛は、家族を対象にしているため、Iraqw 族ではもっとも怖い〈Daari〉と考えられている。この他、フクロウも〈Darusumo〉の使いであり、屋敷の近くで鳴き出すとただちに追い払わなければならない。もし、打ち捨てておくと一家は病気になるといわれている。

以上 Iraqw 族のウィッチクラフトには、まだこの外に細かい変異があるが、大きくこの5つの類型にまとめることができる。

2. 反ウィッチクラフトの呪術

さて、Iraqw 族ではこのようなウィッチクラフトに対抗する薬や呪術が発達しており、〈Darusumo〉が徘徊していると判断すると、早速、対策をこうしなければ一家は滅亡するといわれている。それゆえ、家族の大半が病気で倒れたり、あるいは家畜が次々に事故死するといった、予期せぬ不幸にみまわれた場合、それが〈Darusumo〉のせいであると判断されると、〈Qwasarumo〉の処へ相談に行かなければならない。そこで占い師は〈Darusumo〉の存在する方角を示し、薬を与える。もし効果がなければ、さらに占い師を変え、別な薬を探し求めて歩くが、不幸が重なってくると最後に疲れ切って占い師に方角を定めてもらい、一家は〈Darusumo〉の呪いのとどこかぬ処に転居せざるをえなくなることになる。

しかしながら Iraqw 族は〈Darusumo〉を寄せ付けず、その呪縛を抹殺する強い薬は必ずあると信じており、それは、周囲の Bantu 系の部族の処にあ

るといわれ、もし、自己の部族の薬が効果がなければ、他部族の土地に探しに行くことも珍しくない。

そこで、次に〈Gwangaraamit〉の行使に対抗して、Iraqw 族が行なった呪術をハナン山麓の事例から、やや詳しく記述することにしたい。

ある日、Ako oroo⁽⁹⁾ は毎晩、動物が屋敷のまわりを徘徊し出したことに気がついた。はじめは、ジャッカルがやってきたが、つづいてハイエナがうろつきだしたので、女たちも不安を訴えはじめた。真夜中に、犬がけたたましく吠えるので外へ出てみるが、何の姿も見あたらない。また畑にもムハンガ〈Mhanga〉（やまあらしと関係がある小動物）が出没しはじめ、朝起きてみると耕地のそっちこっちに大きな穴をあけて、いたずらも激しさを増してきた。そして、とうとう屋敷の一部である〈Atlumo〉（草ぶきの家）の入り口の扉にハイエナのかじった跡があるのが発見された。これらの一連のできごとによって、ついに Ako oroo は自分の一家が〈Darusumo〉の呪詛の対象になっているという判断にたった。そこで Ako oroo は、さっそく隣の部落の Shishie に出掛け、Qwasarumo Taway を訪れ、〈Daari〉の呪いをとく薬の調合を依頼した。この呪術師はクランは Hay Fiso であり、このような〈Daari〉の呪詛に対して効力のある薬をつくるという評判であった。Ako oroo はこの〈Qwasarumo〉の薬をもらい、その指示どおりに行動したが、相変らず夜になるとハイエナが騒ぎたてるのがおさまらず、この薬は効果がないことがわかった。次に、かれはやはり近くの部落の Afandi に行き、Ako Birawuri Qwaray の助力を乞うた。屋内で秘密に、石とヒョウタンを使って占ってもらった結果、「お前のところの牛が死んだのも〈Daari〉のせいであり、これを行使している〈Darusumo〉は頭の中央に丸い禿のある男である」ということがわかった。Ako oroo は確かに、自分も日頃から怪しいとにらんでいた男の中に、頭の禿げた奴がいるのに思いあたった。色は黒く、骨組みのしっかりしたこの男に用心しなければならないということをかれは胸の中に深く刻みつけた。〈Qwasarumo〉はさらに続けた。「お前の成牛のうち7頭が事故で死んだであろう。また、これまでに無駄な死にかたをした12頭の羊はすべてこの〈Darusumo〉のせいである」と証言した。Ako oroo はこれからどう行動してよいのか、分からなくなり、将来についてふたたび石で占ってもらった。占い師がいうのには「お前がこのような〈Daari〉の難からのが

れたいと願うならまず第1に、色の黒い人間を探す必要がある。ただし、この土地の人間ではなく、ここよりも寒い土地に住んでいるものがよい。お前は高地に住んでいる人間のなかから色の濃い者を探してくることだ」。そこで Ako oroo は自分の知っているかぎりの色の黒い人間を思い出してみたが、しかし、仲々占い師の注文どおりの人間は頭にうかび上ってこなかった。ちょうどそんな時、自分と同じクランの Hay Somawey に属する大長老である Ako Hooki が Giting から20マイルほど離れた Ndareda に滞在している情報がかれの耳に入った。ややたって自分の屋敷に親族が集まった時に Ako Hooki もやってきたので、かれに自分の屋敷が〈Darusumo〉にねらわれていることを訴え、そのままかれをひきとめ、宿泊してもらうことになった。その晩、やろりハイエナが数頭やってきて、前庭に盛ってある牛の糞のやまを蹴散らかし、さわいでいるのが聞え、それが朝まで続いた。翌朝、Ako Hooki は起きあがると、「どうしたのか、お前の家は？」とたずね、Ako oroo は「知らない、しかしこのままではこの家の誰れかが〈Darusumo〉に殺されるだけだ」と答えた、Ako Hooki は「一緒に来い」といい、長老の集会につれてゆき、oroo 家の災難を話して、色の黒い人間で、ハイエナの怖れる薬をつくれるものを選択するように会議にはかった。そこでちょうど〈Qwasarumo〉の注文どおりの男がみつかった。かれは Ako Hooki の叔父にあたり、Ako oroo にとっても母系的なつながりがある縁者であった。長老たちはこの男を呼んで事情を説明し、Ako oroo にふりかかっている〈Daari〉の災難に力を貸すように依頼したのである。Ako oroo はこの男を自分の屋敷に案内し、〈Daari〉の呪力を遠ざけるための薬を作ってくれるようたのみ、礼金として10シル（500円）さし出したが、男は長老たちの集まりで、すでに互いがまったく他人でないということが分かったので2シル（100円）だけうけとり、この仕事をこころよく引きうけることになった。そこで一定の日をしめしあわせておいて、夜2人はひそかに薬づくりにとりかかった。この日は一切の訪問客をことわり、入口も早くから閉ざして、この仕事にのみ集中される。薬をつくり終わると、男はそれを屋敷の周囲に9度に分けて、まくように指示し、自分はここで寝るのはいけないといって、ほかの家に泊りに出かけた。Ako oroo は屋敷のそとまわりでの作業を終えると、次に屋内にもどり、新しいヒョウタンに水を入れ、手にもって、その水を口にふくんでは奥の部屋

から順番に、霧吹きにして吐きかけ、戸口までくると左・中央・右という順番で水を吐きかける。最後にヒョウタンに残った水を牛の肩にかける。これで一切の作業が終わり、かれは床につく。翌朝、誰れよりも早く、Ako orooは入口の横木の上部のみはずして外へ出て、Dorebe（イラク語）の実をとってきて、それを足でもみつぶし、周囲に少しずつ投げつける。この作業が終わると、横木を全部取って、牛を前庭に追い出す。以上で〈Daari〉の呪縛を消すための一切の儀礼は終わったわけであるが、これから3日間〈Xawi〉となり、いくつかの禁忌を守らなくてはならない。

まず、①家族全員、期間中はマサカリをつかって薪を割ってはならない、②針を使って縫いものをしてはいけない、③石と石をたたいて、ひき石のめづまりをとらなければならないが、この作業の禁止、などである。4日目になって、朝ふたたび〈Dorebe〉の実をとってきて前と同様の所作を繰り返えし、〈Xawi〉がとかれ、訪問客をむかえることができるようになる。このような〈Daari〉を払う薬をほどこした結果、3ヵ月間ほどは、まったくハイエナは出没しなくなったという。

3. ウィッチクラフトの告発

さて、一般に、Iraqw族は確かに自己の身边に〈Darusumo〉が徘徊しているという強い疑いをもっても、具体的に名前をあげることを避ける傾向が強い。それは、すでに述べたように、相手を妖術師ときめつけた場合、自分もその言葉に責任をもって〈Loo〉を行ない、以後身の潔白を証明するために、互いに呪い合いの生活を続けなければならなくなるからである。しかしながら、ある許し難い事件の発生を契機にして、地域集団の長老全体によってウィッチクラフト告発の密議がこらされることがある。それは最初、事件の直接被害者が、〈Kahamusmo〉といわれる土地の草分けに訴え出て〈Darusumo〉の正体を暴露することに始まる。そしてこれまでのすべての被害が、ひとりの人物に集約されるが、この告発は普段からその人間が地縁集団内部において〈Darusumo〉として嫌疑がかけられていることを前提として初めて成り立つ。客観的には、地域の住民から嫌われており、円滑な人間関係を結べなくなった者や、異常なパーソナリティの持主が〈Darusumo〉として浮かび上がってくるのである。〈Kahamusmo〉は緊急に長老を招集し、〈Darusumo〉の容疑者を除いて秘密に会議を開き〈Qwasaumo〉を呼んで占いの結果を報告

させ、事件の原因について審議する。もし、この席上において、一切の被害の根源がこの人物の行使した〈Daari〉であると証言されると、早速告発の手段が相談され、青年たちを呼んで工作にとりかかる。すなわち、青年たちは森へ行って大木を切り倒し、所定の場所に運んでくる。長老の指示により、夜この家のものが寝しずまった頃をみはからって、家の戸口をこの大木で閉鎖し、棘のあるアカシアの枝でおおい出られないようにする。内部の人間は、翌朝、閉鎖された入口を見て自分が〈Darusumo〉として告発されたことを覚悟し、夜を待って壁を破って逃げださなければならない。さもなければ、家ごと焼き殺されるからである。告発された者は財産を持ち去ることもできないし、二度とこの地域にはもどってこれなくなる。このような〈Darusumo〉追放の例は30年ほど前に、Giting 地区では2度起こったと伝えられている。これよりもさらに、さかのぼってまだ Iraqw 族が領域拡大を開始するに前には、地域集団全体から〈Darusumo〉の容疑をうけると妻や子供は別に隔離し、この男を会議の場所へ連行する。若者たちに身体をつかまえられた男は自由を失い、地面に押し倒される。青年達は用意してあったV字形の木の又で男の首や手足を地面に打ちつけ、どの人間やどの家族に薬を使用して呪いをかけたか問いつめられる。この間に、焚き火は次第に彼に近づき、白状をよぎなくされるという。

そして裁判の席に、隣接する遊牧民、Datoga 族を呼んで〈Darusumo〉の(10)小指を切りとらせ、ひきあげさせるのである。男はそのまま焼き殺される。ところで一度このような、〈Darusumo〉の烙印をおされると、子孫にまで累をおよぼす。つまり父親が〈Darusumo〉であれば長男がこれを引きつぎ、母親であれば長女が〈Darusumo〉になると考えられている。

さて、〈Darusumo〉として、地域集団を追放された人間や家族は、これまでにかんりの数にのぼるとみえ、Iraqw 族の母村には Arabe という地域名のところがある。ここはかつて〈Darusmo〉にされたものが次第に集まって形成された集落であるといわれている。つまり最初に〈Darusumo〉として追放された Rabe という男のまわりに、次第に同様な所遇をうけたものが集合し、集落を形づくっていったわけである。つまり、Arabe とは、この地の最初の〈Darusumo〉の名をとってつけられたものである。

V 結 語 ——展望及び考察——

以上、Iraqw 族の宗教的観念の構造と、これをめぐる儀礼と慣行の基本的な面について報告をこころみたわけであるが、すでに明らかなように、超自然的存在に対する信仰は、かれらの生活の重要な一部になっており、ヨーロッパ文明の浸透により、科学的知識は普及しつつあるが、これによって、Iraqw 族のウィッチクラフト信仰が弱化したという徴候はほとんどみうけられない。すなわち、Iraqw 族の土地も、最近では近代的医療設備のあるミッション系の病院や、政府の保健および診療機関も建ち初め、医学的知識は確実に普及されつつある。だが、それにもかかわらず、病氣、死亡、不幸、不妊などの事態が発生すると、呪術師〈Qwasarumo〉の占いを信じ、呪薬をもらいに出かけるのである。つまり、Iraqw 族の宗教的観念は文明の恩恵を享受する行為と少しも矛盾していないといえることができる。

キリスト教の宣教師による熱心な布教活動は、Iraqw 族の一切の占いや呪術行為を禁止し、ウィッチクラフト信仰を否定しているが、キリスト教信者の漸増に反して、長老集団の伝統指向の姿勢は強く、根本的な面での変化はみられない。だがキリスト教は、徐々に完全に近いクリスチャンの育成をめざして普及しており、Iraqw 族のなかにも少数ながら、インテリ青年層が生まれつつある。それゆえ急速な文化変動はもう少し後に予想されてくるが、現在は、このマイノリティ・グループは部族の基本構造に直接影響するところは少なく、部族の宗教の枠外に存在しているといえる。

最後に、Iraqw 族の宗教について若干の考察をつけ加えるならば、まず第1に Iraqw 族については、以前から Cushites の系統に属するという見方が言語学の側にあること。事実、Iraqw 族の宗教には、Cushites 文化に起源をもっと予想されるいくつかの要素が発見されており、たとえば、Iraqw 族の唯一神〈Loa〉は、イスラム侵入以前、Somali が信じていた〈Waag〉という Cushites の Sky God と無関係とはいえない。第2には、Iraqw 族は農耕と牧畜を巧みに融合させた特異な生産＝生活様式を歴史的に発展させてきたことから、半農半牧民といわれており、このため農耕と牧畜の両方の生産様式を反映した世界観や宗教的儀礼が発達していること。それが、この部族の宗教の性格を一層、複雑多様にしているわけであり、この点の検討が今後

必要と思われる。第3には、Iraqw 族のクラン形成が生産様式のいかんをとわず、周囲の他部族の同化を歓迎し、積極的に同入することによって行なわれ、部族として拡大してきたという事実があること。したがって、Iraqw 族の宗教が、どこまで純粋に維持されているか疑問の起こるところであり、Iraqw 族の宗教的特徴も部族関係の歴史的関連を明らかにすることによって解決に近づくことができると思われる。

以上、注目すべきことは、これらの問題への接近が、Iraqw 族の文化的位置づけを可能にするにとどまらず、一部族を越えて牛牧文化全体の構造的把握にまで発展する可能性をもっていることである。 (帯広畜産大学)

- (1) 米山俊直「イラク族の生活と社会」、米山俊直「イラク族の基本的概念群について」、和田正平「イラク族地域集団の形成過程と変動」、和田正平「イラク族地域集団の構造と機能」——以上、今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究』、西村書店、1968年、所収。
- (2) Winter, E. H., *Territorial Groupings and Religion among the Iraqw*.
- (3) Hantingford, G. W. B., *The Southern Nilo-Hamites*, 1953, London, p. 127.
- (4) Ramadhani Mzee Hemedi B. E. M., *Mapokeo Ya Historia Ya WAIRAQW*, East African Literature Bureau, 1962.
- (5) Winter E. H. は〈Netlangw〉を Sprints という言葉で表現しているが、米山俊直はしばしばこれを悪魔悪霊としているのには疑問がある。
- (6) 〈Gii〉の儀礼に集合する長老の地縁範囲については、和田正平、前掲論文を参照されたい。
- (7) 最近、Iraqw 族は出産時の〈Xawi〉を怖れて、ミッション系の病院において分娩することが多い。
- (8) Village Development Committee の略称。Iraqw 族の村では20軒〜30軒位を単位に地縁集団を代表する V. D. C. が選出され、多くは信頼された長老が当たる。
- (9) Akoo とは Iraqw 語で長老という意味の敬称である。
- (10) 切りとった小指を Datoga 族の青年は意中の娘の前にもって行き、自分の勇気を示して娘を獲得したということである。

Beliefs and Practices among the Iraqw of Tanzania

SHOHEI WADA

(Obihiro Zoo-technical University)

This report is based on the data collected by social anthropological field work from 1964 to 1966 at the foot of Mt. Hanang concerning Iraqw tribe expansion area in the northern region of Tanzania.

It is said that the Iraqw have a solid, unique religion which we can not be found among the many surrounding tribes; that their religion is complicated, not only in the belief system, but also in the practices. The author tried to verify these accounts of the Iraqw religion's connection with social structure by investigating their supernatural beings, spirits of the dead, curses, witchcraft, etc.

We might find a way to solve the East African Cattle Culture Complex by comparing the traditional beliefs and practices of the Iraqw with those of Nilo-Hamates and the other Hamites in Northern Africa.